

吃音幼児の母親の子どもとの相互交渉行動特性に関する研究

若葉陽子（東京学芸大学特殊教育研究施設 言語障害児教育研究部門）

<はじめに>

吃音児の臨床指導において、母親の子どもとの相互交渉行動に問題が見い出されることが非常に多い(Wakaba 1986b)。吃音児の両親・あるいは母親に問題があることが研究上の知見に基いて指摘されるようになったのは、1950年代以降のことであり、このような研究は散見される。Moncur(1952)は、“吃音児の母親は過保護であり、要求水準が高く、批判的で、非常に支配的である。”ことを指摘し、Kinsler(1961)は“吃音児の母親は、内面化された拒否(covert rejection)、あるいは外面的な拒否(overt rejection)を示すことが多い。”ことを明らかにしている。

このような母親の子どもに対する態度は、子どもとの相互交渉場面において具体的な行動として顕在化されると考えられる。

また、言語治療機関や育児相談あるいは教育相談機関等を訪れる吃音児の母親は、子どもの吃音に対処するためには、子どもに対する態度を受容的なものに変化させることとか、子どもの言語行動を注目、訂正、拒否することを止めるなどの言語的応待のしかたをかえるなどの一般的なガイダンスを受けるのが通常である。しかしながら、ガイダンス場面において、助言指導者から、ことばを使って一般的な配慮事項を聞かされたのみでは、母親の十分な態度の変化が生じないことが多い。各母子相互の具体的なかゝり状況における問題点を、母親が客観的に認識・改善していくような方向を探っていくことが必要である。このためには、母親自身の母子相互交渉場面のビデオ録画記録を、客観的資料として利用することが有効であった(若葉、1986a)。

吃音児の母親の母子相互交渉状況を客観的に分析することは、母親の子どもに対する態度や、

母親指導のための基礎的情報を知る上で重要である。

<目的>

相互交渉場面における吃音幼児の母親の行動特性を明らかにする。

<対象者>

発吃後4ヶ月以内の吃音幼児(4才未満)で検査・治療歴のないもの5名の母親と、吃音幼児に年齢を同一にする正常児5名の母親。いずれも男児で第1子で表1の通りである。

表1 対象者

吃音児		
母親の年齢と学歴	観察時年齢	発吃年齢
A 33歳、短大卒	2歳11ヶ月	2歳10ヶ月
B 31歳、専門学校卒	3歳1ヶ月	3歳0ヶ月
C 27歳、高校卒	3歳2ヶ月	3歳1ヶ月
D 30歳、大学卒	3歳5ヶ月	3歳1ヶ月
E 33歳、中学卒	3歳7ヶ月	3歳5ヶ月
正常児		
母親の年齢と学歴	観察時年齢	
F 30歳、専門学校卒	2歳11ヶ月	
G 30歳、大学卒	3歳1ヶ月	
H 32歳、短大卒	3歳2ヶ月	
I 31歳、高校卒	3歳5ヶ月	
J 37歳、大学卒	3歳7ヶ月	

<方法>

(1)記録方法

東京学芸大学特殊教育研究施設内の遊戯室に母子を入室させ、観察することは知らせずに、インストラクターが「子どもさんがこの建物によく慣れるよう室内の遊具を使って自由に遊ばせて下さい。30分位遊んで慣れた頃、遊びの様子をみさせていただきます」と指示し、30分間自由に遊ばせる。隣接した観察室に設置されたビデオ録画記録装置を操作し、母子の相互交渉状況を録画記録する。遊戯室内の隠蔽ボックス

内に2台のカメラが設置されており、観察室内での遠隔操作により、2台のカメラは同時に同一地点に焦点を合わせることが出来、また、被写体の動きを高速で追尾することが可能であるので、母子の行動をもらさず記録出来る。

(2)分析の方法

(a)不適切行動の評定

3名の吃音児指導経験のある言語治療担当者がビデオ録画記録をくり返し視聴し、母子の相互交渉文脈における、以下の母親の不適切行動を記録し、その生起の有無を評定する。

<グループⅠ> 子どもの自発的行動の尊重

- ①子どもが遊んでいる途中で自分が選んだ遊具を提示する。
- ②子どもが探索している途中で自分が選んだ遊具を提示する。
- ③自分が好む遊びに子どもをリードする。

<グループⅡ> 子どもの遊びの特質の理解

- ①子どもが遊んでいる時の子ども自身の興味を理解しない。
- ②子どもがやっている遊びの意図を理解していない。
- ③子どもが遊び方を考えている時に、遊び方を示す(子どもが遊ぶ時には、自分で遊びについてのイメージを持ったり、探ったりすることを知らない)。
- ④子どもが次の遊びに移っていくタイミングが理解出来ない(子どもの遊びが移りかわることを知らない。遊びの転換時点を察知できない)。

<グループⅢ> 子どもが遊ぶことへの関心

- ①子どもの遊びをみていない。
- ②子どもに対し傍観者的な姿勢をとる。
- ③子どもがやっている遊びに注意を払わず、自分が好きな遊びを自分1人で楽しんでやっ
てしまっている。
- ④子どもの目の高さに比べて、目の高さが高い。

<グループⅣ> 子どもからの言語的な働きかけに対する応待

- ①質問や言語的な働きかけを無視する。
- ②タイミングがずれた応待をする。
- ③働きかけを十分把握せず、不適切な応答をする。

<グループⅤ> 受容の態度

①共感を求められても感知できず、共感を示さない。

②言語的な承認を求められても承認を与えない。
以上の項目は予備的資料である、10名の吃音児(3才~5才)の母子自由遊戯場面のビデオ録画記画を4名の言語治療担当者がくり返し視聴することによりとり出したものである。

(b)不適切行動の生起状況の分析

不適切行動の生起状態をより分析的に把握するために、細密なビデオ分析を行う。一つの意味的なまとまりを持った行動、発話、あるいは発話と行動を一行動単位として記録する。ビデオ録画を視聴して、母親の側で生じた不適切行動を見出し、それに先行する子どもの側からの働きかけを記述し、それに対する母親の応待を記述する。母親の不適切行動は前述の(a)における各項目に分類する。各項目に該当しない不適切行動は別途とり出し、今後の不適切行動評定の資料とする。このような精密な分析により、第1段階としてとり出した不適切行動を補完したいと考えた。3才1ヶ月児のビデオ録画記録を対象とした。

各行動単位の記述に関する信頼度は、2名の記録者が、同一のビデオ録画記録を10分間討議をしながら記述し、その後、別の吃音児の母子ビデオ録画記録を5分間別個に記述し、次の式で両者の記録行動単位数の一致度を求めた。一致度は82%であった。

$$\frac{\text{両者が一致して記録した行動単位数}}{\text{記録された母親および子どもの行動単位数}} \times 100$$

各項目への分類は両者が討議の上行った。

今年度は、3才1ヶ月の2名(BとG)を対象に10分間のビデオ録画を分析し、この方法の妥当性を検討した。

<結果および考察>

不適切行動の評定結果は表1の通りである。吃音児と正常児の母親では、自由遊び場面において対照的な差異がみられた。吃音児の母親は、不適切行動としてとりあげた項目に該当する行動が全般的にみられ、特に<子どもが遊んでいる途中で自分が選んだ遊具を提示する、子どもが遊んでいる時の興味を理解しない、子どもの

表1 ビデオ録画の評価結果

行動の内容	吃音児					正常児						
	A(2:11)	B(3:1)	C(3:2)	D(3:5)	E(3:7)	F(2:11)	G(3:1)	H(3:2)	I(3:5)	J(3:7)		
自発的行動の尊重	•子どもが遊んでいる途中で自分が選んだ遊具を提示 (常に)	○	○	○	○	○	×	×	△	×	×	←
	•子どもが探索している途中で自分が選んだ遊具を提示	○	×	○	○	○	×	×	△	×	△	←
	•自分が好む遊びにリードする (常に)	○	△ (同上)	○	○	○	×	×	△	×	×	←
子どもの遊びの特質の理解	•子どもが遊んでいる時の興味を理解しない	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	←
	•子どもの遊びの意図を理解しない	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	←
	•子どもが次の遊びを考えている時に次の遊びを示す	○	×	○	○	○	×	×	△	×	×	←
	•子どもが次の遊びに移っていくタイミングを理解できない	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	←
子どもが遊ぶことへの関心	•子どもの遊びをみていない (時々)	○	○	×	○	○	×	×	×	△	×	←
	•傍観者のような姿勢をとる (常に)	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	←
	•子どもの遊びに注意を払わず自分が好きな遊びを自分1人で楽しんでやっている	○	○	○	○	○	×	×	△	×	×	←
	•目の高さが高い (常に)	○	○	○	×	○	×	×	×	△	△	←
子どもからの言語的働きかけに対する対応	•質問や言語的な働きかけを無視する (時に聞きかけを返す)	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	←
	•タイミングがずれた応対をする (聞きかけを返さない)	×	○	○	○	○	×	×	×	×	×	←
	•働きかけを十分把握せず不適切な応答をする (子どもの意図を解釈できない)	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	←
受容的態度	•共感を求められても感知出来ず共感を示さない (少し共感を示す)	○	○	○	△	○	×	×	×	×	×	←
	•言語的な承認を求められても承認を与えない (時には言葉)	○	○	△	○	△	×	×	×	×	×	←

○ ある

△ わずかにある

× なし

← 吃音児の母親に共通してみられた行動

←← 吃音児の母親にかなり共通してみられた行動

遊びの意図を理解しない、子どもが次の遊びに移っていくタイミングを理解できない、傍観者のような姿勢をとる、子どもの遊びに注意を払わず自分が好きな遊びを自分1人で楽しんでやっ^てしまっている、質問や言語的な働きかけを無視する、言語的な働きかけを十分把握せず不適切な応答をする>という行動が顕著にみられた。詳しくは、若葉(1987)を参照されたい。

不適切行動の生起状況(BとG)は図1の通りである。吃音児と正常児の母親では、明らかに前者が、不適切行動が頻繁に生じている。この結果は10分間のビデオ録画に関するものであるが、30分間の分析結果では、恐らく、両者の生起頻度の差はより著しくなるであろう。

この分析の結果、補充するための不適切行動としてとり出されたものは、①子どもからの言語的働きかけをさえ切る、②こどもの要求を拒否する(手をはねのける)→吃音児の母親、③子どもからの遊びへの働きかけを消極的に拒否する、→正常児の母親、であった。

これらを見ると、不適切行動項目をして、とり出せるものが残存していること、不適切行動の中でも、その程度に段階があることが示唆される。今後は、未分析のビデオ録画記録を分析して、不適切行動項目を補充していくことや、不適切行動の不適切性の度合いを段階づけていくことが必要と考えられる。

現時点の結果は研究途上のものであり、今後

検討を続け、より明確な結果を得たいと考えている。

文 献

Kinstler, D.B. 1961 Covert and overt maternal rejection in stuttering. Journal of Speech and Hearing Disorders, 26, 2, 145-155.
 Moncur, J. P. 1952 Parental domination in stuttering. Journal of Speech and Hearing Disorders, 17, 155-165.

若葉陽子 1986a 吃音幼児の母親指導：
 -Filial therapyの適用-、音声言語医学
 27, 1, 118-119.

Wakaba Y. 1986b Research on the
Logopedics and Phoniatics: Issues
 for future research. 310-311.

若葉陽子 1987 吃音児の母子相互交渉に関する研究—予備的観察—、東京学芸大学特殊教育研究施設研究報告、36、(印刷中)

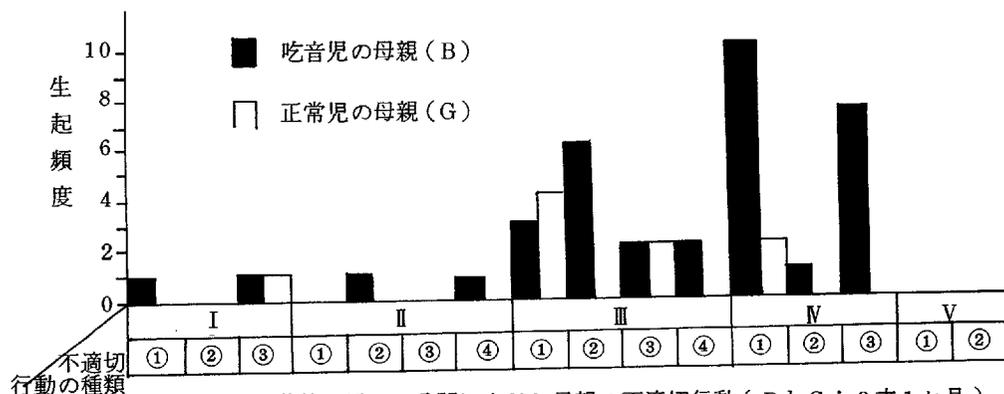
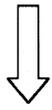
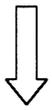


図1 母子遊戯場面10分間に生じた母親の不適切行動 (BとG: 3才1ヶ月)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



<はじめに>

吃音児の臨床指導において、母親の子どもとの相互交渉行動に問題が見い出されることが非常に多い(Wakaba 1986b)。吃音児の両親・あるいは母親に問題があることが研究上の知見に基いて指摘されるようになったのは、1950年代以降のことであり、このような研究は散見される。Concur(1952)は、“吃音児の母親は過保護であり、要求水準が高く、批判的で、非常に支配的である。”ことを指摘し、Kinsley(1961)は“吃音児の母親は、内面化された拒否(covert rejection)、あるいは外面的な拒否(overt rejection)を示すことが多い。ことを明らかにしている。

このような母親の子どもに対する態度は、子どもとの相互交渉場面において具体的な行動として顕在化されると考えられる。

また、言語治療機関や育児相談あるいは教育相談機関等を訪れる吃音児の母親は、子どもの吃音に対処するためには、子どもに対する態度を受容的なものに変化させることとか、子どもの言語行動を注目、訂正、拒否することを止めるなどの言語的対応のしかたをかえるなどの一般的なガイダンスを受けるのが通常である。しかしながら、ガイダンス場面において、助言指導者から、ことばを使って一般的な配慮事項を聞かされたのみでは、母親の十分な態度の変化が生じないことが多い。各母子相互の具体的ななかり状況における問題点を、母親が客観的に認識・改善していくような方向を探っていくことが必要である。このためには、母親自身の母子相互交渉場面のビデオ録画記録を、客観的資料として利用することが有効であった(若葉 1986a)。

吃音児の母親の母子相互交渉状況を客観的に分析することは、母親の子どもに対する態度や母親指導のための基礎的情報を知る上で重要である。